かけることは当時のユダヤ人社会では衝撃的な言葉でした。当時、イスラエルでは、神を父と呼ぶことはありませんでした。イスラエルの国家の父という概念はありましたが、個人的に呼びかけたりは出来ませんでした。でも、イエス様は**「お父さん！」**と祈りなさい教えます。この呼びかけは、祈りは先ず、この立場を認める所から始まるのだという事を弟子達に教えるためでした。祈りはまず「する」という行為からではなく「ある」という立場から始まります。つまり「ＤＯ」ではく、「ＢＥ」子であることを認めることからはじまるのです。

2. 父の願いは子供を喜ばせる事

私は聖書の放蕩息子の個所（ルカ15章）を読むと、天の父がなんと子供に甘いお父さんであるかに驚きます。これでは正に親バカです。子供の性格をよく知っていながら敢えて財産を分け、あげくの果てに使い果たし、無一文になって帰ってくる息子をずっと待ち続け、やっと帰って来た子供に自分から駆け寄り、受け入れ、赦し、なんと家中で一番良い服を着させて宴会まで開きます。こんな親がいるでしょうか？いたとしたらそれはチョット甘やかし過ぎに思います。でも、これが神の真実な姿です。聖書の神である天の父は私達子供にこのようにして下さるのです。驚くべき愛の方です。つまりそれは100％の受容ということです。受け入れてくださるという事です。その際、子供の出来不出来は関係ありません。いやむしろ出来の悪い子供こそ可愛く、心配です。これが子供として扱うという事です。

子供は親にとって特別な存在です。子供とは特別扱いされるものということです。でも、それはただ甘やかされるという事ではありません。子供として扱われるという事は、親は親としての責任を最後まで果す為に全力を尽くすという事です。

親は子供の言う事をどこまで聞くのか？又、子供は親が自分の願いをどこまで聞いてくれるのか？これが問題です。以前、歯医者に言った時、３～４才の女の子が親と共に歯の治療を受けていました。先生が注射をしようとした時、その女の子は激しく泣きながら、叫び続け、結局、親も医者も根負けして治療を止めてしまいました。終わった後、待合室でその子は一生懸命母親に弁解をしていました。なぜ注射が嫌だったか、実に達者な言葉でお母さんに長々と説明しました。でも最後に親は子供の目をしっかり見つめてこういいました。「わかったよ。でもね、だからといってこれで終ったら虫歯はひどくなって、もっともっと痛い思いをしなければならないの。だから、明日は必ず治療を受けるのよ！」と。お母さんの真剣な眼差しを見て子供は「うん！」と素直にうなずきました。子供の必死な願いで、親の心が変わる事があるかもしれません。しかし、子供にとって必要な事は、親は必ずやり遂げるという事です。

3. 子供の願いも親を喜ばせる事

ヨハネの福音書４章にあるサマリヤの女との出会いの時、イエス様が語られた礼拝者の条件があります。それは、父が望んでいる礼拝者の姿は、**「霊と真によって礼拝を捧げる」**ものだという言葉です。これは、親が願う子供の姿です。つまり、霊とはその人の本質、ありのままの姿です。礼拝は、形や儀礼的な肉の部分で行なうのではなく、霊というその人の本質をあらわにして、さらけ出し、子供らしく神の前に出ること。そして、真とは正直に真実をもってという意味です。つまりこれは親から愛されている子供らしく、子供として親に接する。それが親が最も願っている事です。そして、その子供の願いは、子供なりに何とか親を喜ばせたいという事です。

以前、私の妹が母親といつも仕事の帰り、一緒に買い物をして帰っていました。ある時、母親がショーウィンドーの中の素敵なバッグ（皮製の高級そうなバックです）を見て、「高そうだね。チョット手が出ないわね」そう言いながらいつも帰りました。そんなある日の帰り道、母親がいつものショーウィンドーに目をやるとそのバッグがありません。母親は「誰かが買ってしまったんだね。残念！でも仕方がないよね。いつまでも売れないとお店も困るからね」と言いました。でも内心はとても残念そうにしていました。その日、家に帰ってから妹は、いきなりパンパカパ～ンと言って、母親に一つの包みを渡しました。その中身はあのバッグでした。実は妹は母親の喜ぶ顔が見たくてお金を貯めて買っておいたのです。母の目には涙が溢れていました。あまりにも思いがけず突然だったのでビックリしたのです。母親が喜んだのは言うまでもありません。子供にとっての最大の願いは、親を喜ばせる事です。

私達は天のお父さんの子供である事をしっかりと理解しなければなりません。
イエス様はこう言いました。**「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」マタイ18章３節**

私達は天の父の子供です。愛されている子供としてこれからも父の心を喜ばせる歩みをしていきましょう。■